

人々に「ここまで」と記さず

「オナナジルの口にしむ

ておぐべきことを語ること。

それをもてはやす文化」とい

う。過去の方引きをテレビで

語り、占い師に私生活を打ち

明けるタレント、ブログで犯

罪行為を告白する若者、掲示

板の延長で秋葉原に突っ込ん

だ男。「過剰なまでに心につ

いて語るよう仕向けられ、促

されている。村上春樹の言葉

を借りるなら『自閉症』。メ

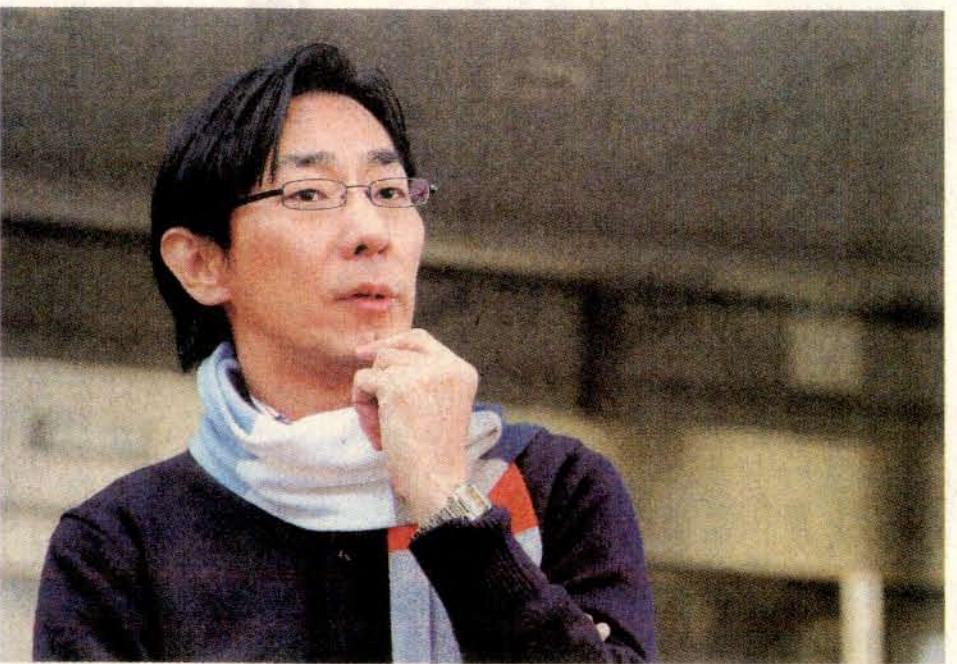
ディアに乗ることはお金にな

ることもある。資本主義の

人には「ここまで」と記さずし、自分語りを続け、一方で外部にさらされている。フランスの精神分析家ジャック・ラカン（1901～81年）研究の第一人者、京都大人文学研究所准教授の立木康介さんは、現代を「露出する心の時代」ととらえ、可視化される「心」、モノ化する「心」の精神病理に問い合わせる。（河村亮）

京都大人文学研究所准教授

## 立木康介さん



精神分析家は精神分析を受けなければならない。今も、年に2回はフランスで分析を受ける。「分析家になるためのトレーニングでもあり、自分自身を分かりたいんです」と語る立木康介さん（京都市左京区・京都大）

# 露出する「心」の病理問う

## 思考も詩も平板に 抑圧不在の世界

らの享楽を見せびらかす傾向になる。抑圧とは我慢するシステム。現実では、快樂の追求を一旦中断して満足に至る経路を頭の中で組み立て、折り合いを付けなければならぬ。それが思考だ。抑圧がなくなった時代には思考もない。

それはどこに向かうのだろう。「ラカンは、抑圧について、あることを言わない代わりに別の表現をすること、とりに別の表現をすること、とした。言わねなかつたことが影になり、それが無意識となる。抑圧の不在は、別のことである。ラカンは、別のことと言ふ表現をできなくした。それがポエジー（詩）の衰退、アートの表現の喪失につながっているのではないか」。メタファー（隠喩）がなくなり、言語の平板化、心の平板化をもたらすという。

ラカンと出会ったのは大学時代だ。「人間は言語の外に出られない」というラカンの基本的な考えになじんだ。「言葉をしゃべる前に生きて

## モザイク 新世紀

学に挑む

りとして一律にコントロールされ。『突出した論点が他ののみ込んで肥大化する傾向とも無関係ではない』。その根源は何か。抑圧が働くかない世の中になつているからだ、という。「タブーがなくなり、抑圧が機能しないと、自

由で量的に死んでいたのだから間の内面。そこに投資を始めている』という。私的領域を公開し合う時代は、大規模な集団的暗示が働きやすい。内面が可視化され、ひとかたまたとして「突出した論点が他ののみ込んで肥大化する傾向をも無関係ではない」。その根源は何か。抑圧が働くかない世の中になつているからだ、という。「タブーがなくなり、抑圧が機能しないと、自前から、分かりやすく語るイデオロギーに反発があつて、とされるラカンの思想。「以前から、分かりやすく語るイデオロギーに反発があつて、でも後で少しずつ分かつた。でも後で少しずつ分かつてくる。言葉の渦。うつそつとした言葉の森のよう

その後、フランスへ留学した。もともと研究者になるつもりはなく、「社会に出て何をしていいか分からなくなつた。そこから逃げてフランスまで行つてしまつた」。そこで社会実践としてのラカンと出会い直し、精神分析の世界へ導かれた。

今、関心を向けるのは、精神分析が乗り越えようとした宗教だ。「人間は脱宗教できるのか。サッカーW杯の熱狂や、ミサのようなマドンナのライブ、『聖地』巡礼する美女キャラのオタクたち。実は宗教的情熱が形を変えて、われわれを取り巻んでいるのではないか」



ついき・こうすけ 1968年、神奈川県生まれ。京都大学院教育学研究科修士課程修了。フランスへ4年間留学。パリ第8大学精神分析学博士。98年、京都大大学院人間・

環境学研究科助手、2007年から現職。専門は精神分析的知の解析と展開。主著に「精神分析と現実界 フロイト／ラカンの根本問題」など。